



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第29主日 B年(2021年10月17日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：イザヤ書 53章10—11節

第二朗読：ヘブライ人への手紙 4章14—16節

福音朗読：マルコによる福音書 10章35—45節

テーマ：わたしの杯、わたしの洗礼

三つの朗読から

【背景】

第一朗読は『イザヤ書』40章—55章、いわゆる第二イザヤとよばれるものからとられています。第二イザヤには四つの主の僕の歌がありますが、今日の朗読箇所は四番目の主の僕の歌からのものです。僕が自分の罪のゆえではなく、人々に代わって神さまに打たれる。その打ち傷によって人々は癒やされ、救われます。僕は、自分のいのちの激しい苦しみの跡を見て満足します。僕の身代わりの死は多くの人を義とするのです。

第二朗読の『ヘブライ人への手紙』では、4章14節から本書の中心テーマである大祭司キリストについての論述が始まります。すでにイエスは**大祭司**であると述べられています(2章17節、3章1節)。しかし、それは神のことばへの服従というテーマの中での言及でした。今日の朗読箇所から始まるのは、大祭司キリストがどのような方であるかという、いわばキリストの存在についての考察です。

今日の朗読箇所は3章1節—4章13節にかけて繰り返された勧告の形式をとっています。しかし内容的には大祭司キリスト論の導入となります。

福音朗読ではイエスさまは旅の途上にあります。「イエスが旅に出ようとされると」(10章17節)、そして今日の朗読箇所の直前に「一行がエルサレムへと上っていく途中」(32節)とあるからです。この旅はエルサレムへと向かう旅ですが、途中で「一行はエリコの町に着いた」(46節)とあって、次第に「エルサレムに近づいて」いきます(11章1節)。十字架へ向かう旅です。

すでにイエスさまは三回目の自分の死と復活についての予告をしています(10章32—34節)。過去二回にわたる受難予告には、かならず弟子たちの無理解がありました(8章32—33節、9章33—34節)。そして、イエスさまに従うことについての弟子教育がありました(8章34—9章1節、9章35—50節)。今日の朗読箇所でも直前の受難予告を受けて、弟子たちの無理解を対照的に描いています。そして弟子教育もなされています。これはイエスさまに従うことの弟子たちへの教育の最後の場面になります。

説教

イエスさまはおっしゃいます。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっているか。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか」(38節)。「杯」はユダヤ人の生活の中で必要不可欠なものでした。安息日の食卓では家長を中心に皆で杯を回し飲みしていたからです。ですから、一緒に杯から飲むことは親しさを表す行為でした。しかも、聖書の中では「杯」に多様な意味が託されています。「杯」とは、①喜びの象徴であり、②罪に対する神の憤りの象徴であり、そして③苦難の象徴だったのです。イエスさまは「わたしが飲む杯」とおっしゃいます。「アツバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」(14章36節)とゲッセマネで祈られていますから、今日の朗読での「杯」とはイエスさまがこれから体験する受難と死のことを意味しています。

「洗礼」はバプテズーですが、もともと水中に沈められるという意味です。そこから転じて苦しみの中に沈められることを意味します。ですから、この節の意味はイエスが自分と同じ苦しみを甘受できるかどうかを尋ねているのです。

イエスさまは担う方です。人々の哀しみと人々の苦しみを。十字架を担ってゴルゴダの丘へと向かうイエスさまの姿は人の悩みと痛みを一身に背負う僕の姿と同じです。今日の第一朗読の「主の僕」とはイエスさまに他ならないのです。

担う生き方をしたイエスさまですから、イエスさまの後に従う人もまた担う生き方をしなければなりません。しかしゼベダイの息子のヤコブとその兄弟ヨハネは、そのような生き方がどういったものであるかを知らないようです。おそらく、イエスさまの十字架を目の当りにして、次第に気がついていったのでしょう。事実、ゼベダイの息子たちは後に殉教します。ヤコブは44年頃ヘロデ・アグリッパ一世によって剣で殺されます(使12章2節参照)。ヨハネは、聖書には記されていませんが、ヤコブと一緒にユダヤ人によって殺されたという伝承が残っています。

「確かに、あなたがたはわたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる」(39節)のイエスさまの言葉は、二人の兄弟の行く末を暗示しているかのようです。面白いのは他のお弟子さんたちがヤコブとヨハネの言動に腹を立てた点です。彼らもまた、地位への関心から自由になっていないことが明らかになります。「互いに平和に過ごしなさい」と勧められているにもかかわらず(9章50節参照)、他のお弟子さんたちは「腹を立て始め」ます。

イエスさまに従う生き方とは、イエスさまのように担っていく生き方です。自分の苦しみ、自分の哀しみ、家族の苦しみ、家族の哀しみ、大切な人の痛みと悩み、こういったものを引き受けていく生き方です。

少しでも仕える生き方を目指したとき、わたしたちはイエスさまにさらに一步近寄るのです。また、イエスさまもさらに一步わたしたちに近寄ってくださるのです。苦しみの杯を飲み干し、哀しみの水の中に沈められますように。